

学級編成替えが児童の学級適応感に及ぼす影響に関する研究

西村 淳 古河 真紀子
(兵庫教育大学大学院学校心理学コース)

浅川 潔 司
(兵庫教育大学大学院・臨床・健康教育学系)

南 雅 則
(兵庫教育大学大学院学校心理学コース)

古川 雅 文
(兵庫教育大学大学院・基礎教育学系)

浜 橋 博
(鳥取市立醇風小学校)

本研究は、小学校6年生児童を対象に学級編成替えを行った際、これが学級適応感へ与える影響について検討することを目的として行われた。公立小学校6年生3学級(83名)が参加した。学級適応感については学級適応感尺度(渡邊, 2006)、学級雰囲気については学級雰囲気尺度(根本, 1983)、社会測定的地位については心理的距離地図(古川他, 1983)を使用した。主な結果は次の通りである。学級適応感の友人関係の得点は、社会測定的地位指数の高群が低群よりも有意に高かった。学級雰囲気の安心の得点は、3月より4月の方が有意に上昇した。切迫の得点は、3月より5月の方が有意に高くなっていた。以上の結果について、学校心理学の観点から検討がなされた。

キーワード：小学校児童、学級適応感、学級編成替え、学級雰囲気、社会測定的地位

西村 淳：兵庫教育大学大学院・学校教育学専攻・大学院生，〒673-1415 兵庫県加東市下久942-1，
E-mail：nishisen@extra.ocn.ne.jp

古河真紀子：兵庫教育大学大学院・学校教育学専攻・大学院生，〒673-1415 兵庫県加東市下久942-1，
E-mail：wa32857@zb3.so-net.ne.jp

浅川 潔司：兵庫教育大学大学院・臨床・健康教育学系・教授，〒673-1415 兵庫県加東市下久942-1，
E-mail：kasa@hyogo-u.ac.jp

南 雅則：兵庫教育大学大学院・学校教育学専攻・大学院生，〒673-1415 兵庫県宝塚市中山荘園3-10，
E-mail：nanchangenki@nifty.com

古川 雅文：兵庫教育大学大学院・基礎教育学系・教授，〒673-1421 兵庫県加東市山国2007-109，兵庫教育大学学校教育研究センター，E-mail：kogawa@hyogo-u.ac.jp

浜橋 博：鳥取市立醇風小学校・教諭，〒680-0022 鳥取県鳥取市西町5丁目353番地，E-mail：junpu-e@mailk.torikyo.ed.jp

The Affect of Reorganization of Class while Promotion to the 6th Grade on Children's Feelings of School Adjustment

Atsushi Nishimura, Makiko Furukawa, Kiyoshi Asakawa,
Masanori Minami, and Masafumi Kogawa

(Graduate School of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

Hiroshi Hamahashi

(Jyunpu Elementary School)

The present study was designed to examine the effects of reorganization of a new class on elementary school students' feeling of adjustment to the class while transition to the upper grade. Students in the sixth grade ($n=83$) from three classes participated in this study. Three scales were used for measurement of student's perception of classroom adjustment, classroom atmosphere, and sociometric status: Adjustment Scale for Classroom (Watanabe, 2006), Classroom Atmosphere Scale (Nemoto, 1983), and Psychological Distance Map (Kogawa et al., 1983). The results revealed as follows: (1) Students who are in high sociometric status group had positive feeling for their classmate relationships than students in low sociometric status group. (2) Students were relieved in April than in March. (3) Students in May had more sense of urgency than in March. These results were discussed from the viewpoints of school psychology and developmental psychology.

Key words: elementary school children, classroom adjustment, reorganization of class, classroom atmosphere, sociometric status

Atsushi Nishimura : Graduate School of School Education, Master's Program in School Psychology, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city Hyogo 673-1415 Japan. E-mail: nishisen@extra.ocn.ne.jp

Makiko Furukawa : Graduate School of School Education, Master's Program in School Psychology, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city Hyogo 673-1415 Japan. E-mail: wa32857@zb3.so-net.ne.jp

Kiyoshi Asakawa : Professor, Department of Clinical Health and Special Support Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1415 Japan. E-mail: kasa@hyogo-u.ac.jp

Masanori Minami : Graduate School of School Education, Master's Program in School Psychology, Hyogo University of Teacher Education, 3-10 Nakayamasouen, Takarazuka-city, Hyogo 665-0868 Japan. E-mail: nanchangenki@nifty.com

Masafumi Kogawa : Professor, Center for School Education Research, Hyogo University of Teacher Education, 2007-109 Yamakuni, Kato-city, Hyogo 673-1421 Japan. E-mail: kogawa@hyogo-u.ac.jp

Hiroshi Hamahashi : Jyunpu Elementary School, Principal, 353 5cyo-me Nishimachi, Tottori-city Tottori 680-0022 Japan. E-mail: jyunpu-e@mailk.torikyo.ed.jp

問題と目的

児童の学級への不適応行動は、個人またはその家庭に原因が帰属されがちであるが、石隈（1999）によれば、児童の問題状況は、児童自身の要因と環境要因の相互作用の結果であり、児童と学級環境が適合した状況になるよう、児童の課題への取り組みが促進されるよう援助されるべきである。渡邊（2006）は、援助ニーズの大きい児童といっても様々なタイプがあり個人差もあるが、全体的に見た場合、学級での生活に適応できることが重要な課題であることを指摘し、個人の問題状況を把握するときや援助を行うときに、個人と環境との関係性を重要視している。それらのことから、学級への適応を考えると、個人要因だけでなく、個人と学級環境要因の関係性にも着目する必要がある。

児童期において環境が大きく変化するのは、進学、転学、進級などの事態である。これらは、それまでの慣れ親しんだ旧環境から離れ、新しい環境に移行する事態である。わが国において環境移行とそれに伴う環境適応を扱った研究には、古川・藤原・井上・石井・福田（1983）、内藤・浅川・小泉・米澤（1985）、北田（1986）、小泉（1987, 1992, 1996）、浅川・夏野・古川・和気（1992）などがある。これらの研究はWapnerの全体論的発達論的システム論的アプローチ（Wapner & Demic, 1998）に基づいてなされたものである。

このアプローチには、2つの理論的柱がある。ひとつは、有機体発達理論における微視発生的発達法則（Werner, 1948）に基づく、定向進化の原理である。Wapner（1981）、および山本・Wapner（1992）によれば、人間・環境システムの発達の程度の差は自己と環境との関係から特徴づけられるという。そして、発達の状態は「未分化な自己・世界関係」から「分化し孤立している自己・世界関係」、「分化し葛藤のある自己・世界関係」を経て、「分化し階層的に統合された自己・世界関係」へ定向的に移行していくというのである。分化し階層的に統合された自己・世界関係では、肯定的な感情が顕著で、孤立・匿名性・無気力・非人間化・焦燥感などが少なく、長期的計画と短期的計画が調和し、外顯的・内潜的行動が統合された統一状態をめざして進んでいるという。

もうひとつは、人間・環境相互交流論（Werner, Cohen & Kaplan, 1973）である。この理論では、人には「身体・生物側面」、「心理的側面」、「社会文化的側面」、環境には「物理的側面」、「对人的側面」、「社会文化的側面」が含まれるとし、それぞれ3つの構成次元があるとされる。そして、それら人と環境とを1つのシステムと考え、人はその環境との間により調和のとれた状態、すなわち均衡化の状態に進んでいこうとするものであるとする。古川他（1983）によれば、相互交流とは、

環境の中での人の経験及び行為を含むものである。それは環境からの一方的な働きかけによって受動的にその環境に順応してだけでなく、個人の側からも積極的に環境を探索し、情報を収集し、環境についての自己の世界を構築、構造化していくことを意味している。

本研究では、これらの理論に基づいて、環境移行時の環境適応について検討していくことを目的とする。そして、危機的な移行状態として、小学校児童の進級時における学級編成替えを取り上げた。小学校における学級編成は特に法的な規定はなく、学校によって違いはあるが概ね隔年か毎年編成替えは行われている。学級編成替えは、それまでに形成された対人ネットワークを部分的あるいは全面的に崩壊させるという点で環境との関係が一時的に危機的な状態に陥る。この問題を扱った北田（1986）は、学級編成は学校経営上の基本的重要事項であるが、そのことが表面化しておらず、研究課題として検討されることが少ないという。

移行期における環境適応に関する先行研究は多く見られるが、小学校や中学校における環境移行にまつわる研究には、内藤他（1985）、小泉（1986, 1987）、浅川他（1992）などがある。

内藤他（1985）は、中学校に入学した10日後から3ヶ月間に教育環境適応尺度・刺激透過性尺度・心理的距離地図を用いて新入生徒の環境適応を検討した。調査対象校が附属中学校であったため、隣接する附属小学校出身者とそれ以外の小学校出身者に分け、入学時の刺激透過について高水準群と低水準群に分けて分析している。その結果、附属小学校以外の出身者の中で刺激透過高水準群は入学当初にクラスをより積極的に受容しようとし、対人交流が積極的で、学業への関心が高いことがわかった。それらの結果から、入学当初において新環境をどのように捉えるかが、その後の適応的な行動に影響することが明らかになった。

転入児童の新しい学校への適応過程を教育環境適応尺度・社会的行動の積極性・消極性を測る尺度を用いて検討した小泉（1986, 1987）は、転入児童とその受け入れ学級児童とを比較し、転入児童の対人交流得点が、受け入れ学級児童と差のない水準に達したのが6月中旬であることを明らかにしている。これらのことから、新年度の開始に伴い担任教師の変更、教室の移動、学級編成替えなどの学習環境の変動を経験するため、これらの状態が転入生の対人環境再体制化に影響を与えた可能性が示唆された。

海外帰国子女が帰国した後の学校適応を心理的距離地図及び面接調査に基づいて、対人関係ネットワーク形成過程から検討した研究に浅川他（1992）がある。この研究の中で、帰国子女にとってヘルパー役を果たす友人、帰国子女と学級の他の友人とをつなぐ役割をする友人を

当該帰国子女の人間関係上のアンカーパーソン（AP）と規定して、心理的距離地図（PDM）の中にそのような人物が描出されるかどうかを見出そうとした。そして、APの存在が認められた帰国子女は、順調な対人ネットワーク形成と学級適応過程が示された。それに対して、準APしか認められなかった帰国子女は、時期は異なるが不適応の様子がみられたとして、準APしかないことは、一時的に援助者の役割を果たす級友を失い、不安定な状態におかれること、すなわち危機的状態を経験することを明らかにした。

以上は、新入学や転校に関する研究であるが、学級編成替えを扱った数少ない研究として、北田（1986）がある。学級内の人間関係が大きく変動する学級編成替えを危機的移行期とみなした北田（1986）は、学級編成替えの有無による集団及び個人のモラルの高さがその後どのように変動するかを比較検討し、どのような要因によって影響を受けるのかを明らかにしようとした。北田（1986）は、学級編成替えの有無と前学級における適応水準の高低、性、調査時期を要因として学級適応感得点の分析を行った。そして、新たな学級への適応感に前学級で形成された適応感の高低が影響を及ぼしていることを明らかにした。なかでも、前学級で形成された適応感水準の高群が進級直後の教師への態度得点が有意に高いこと、4月から7月にかけて得点が低下することを見だし、時期を追うごとに教師と児童の接触の機会が増大し、児童による教師認知が明確になっていく過程で固定化し、以後維持されていくのではないかと考察している。

内藤他（1985）、北田（1986）は、刺激透過性及び適応感を学級適応感に影響を与える要因として検討を行った。これらは、児童の新環境との相互交流が行われる前の環境に対する認知の程度を測定したものである。どちらも環境に対し肯定的な認知をしている児童生徒の方が、学級適応感が高いことが明らかにされた。しかし、北田（1986）は前学級での学級適応感を独立変数として新学級における学級適応感を従属変数とした分析を行っており、その分析方法には疑問が残る。

このように、先行研究の概観からは、危機的な移行としては進学や転学を取り扱ったものが多く、小学校での学級編成替えを扱ったものは少ない。北田（1986）によれば、「編制」は法制的基準が確立しているが、教育経営的基準に照らした「編成」は一樣ではないとし、適応という観点からの学級編成上の留意点は、教育効果を高める上で最大の方策であるはずなのに十分に検討されていないと指摘している。進級により新たな学習への期待や不安、学級編成替えによる新たな級友や担任教師との出会いは期待や不安を同時に伴うと考えられた。しかしながら、小学校での学級編成替えによる教育環境の変化は、転学や進学のそれに比べ小さいことより、学級編成

替えと転学及び進学とが児童の学級適応に同様の影響を与えるとは言い切れない。したがって、小学校における学級編成替えという環境移行事態が児童の学級適応感に与える影響について検討していくことは、編成替えを考慮する際に合理的な意義がある。

学級適応感を測る尺度について渡邊（2006）は、従来の研究で用いられてきた学級適応感の尺度は、社会面の中でも特に児童の集団活動における側面はあまり注目してこなかったと考え、新たな尺度を作成した。石隈（1999）によると、児童期の心理・社会面の発達課題や教育上の課題には、友人関係を広げ、同年齢の集団の一員として行動できることや、集団の学習や活動に適応することがあげられていた。このことから、集団での活動という次元を適応感に取り入れることは、妥当であろう。

学級適応感について河村（2000）は、「学級での集団生活ないし級友との関係や学習活動に対する帰属度、満足度、依存度を要因とする児童の個人的、主観的な心理状態」としている。環境適応は人と環境との相互交流によって図られることから、児童を取り巻く学級集団が児童の心理へ何らかの影響を与えることが考えられる。児童が自身を取り巻く学級をどのように捉えているかを測定する尺度に根本（1983）の学級雰囲気尺度がある。これは、SD型評定尺度で学級雰囲気を把握するのに適切と思われる19の形容詞対からなる。児童自らが所属する学級をどうとらえ、それが学級適応感にどう影響を与えているのかを検討することは児童の学級適応を促進あるいは阻害する要因を見つけ出すことに資すると考えられる。

いずれの先行研究も環境適応の大きな要因として級友との関係があげている。集団内の人間関係の様態及び個々の友人の認知の状態が測定可能なものに心理的距離地図（以下PDMと略記する；古川他、1983）がある。古川他（1983）によれば、心理的距離地図とは、被験者の心に浮かぶ人々を、紙面上に心理的距離を考慮しつつ記入していくものであり、物理的環境のイメージを捉えるためのメンタル・マップと類似した性質を持つ測定法である。浅川他（1992）は、PDMを用いて対人関係ネットワークを作成し、社会測定的地位指数（以下I_{SSS}）を求めた。I_{SSS}とは、ソシオメトリック・テストにおいて、選択排斥の比率を個人別に計量し、児童の学級集団内における人気の程度を見ることができる指標である（田中、1979）。PDMにおけるI_{SSS}には、排斥関係は含まれず、選択関係のみをみることになるが、集団内でより良好な友人関係を築いている児童を見出すことができると考えられ、学級適応における1つの重要な指数になるであろう。以上より、本研究は学級編成替えが行われた学級の児童が新たな環境へ適応していく過程を学級適応感と学級雰囲気認知、および友人関係を関連づけながら検討していくことを主たる目的とする。

方 法

調査対象者

T市内公立小学校5年生（調査時期2回目以降は6年生）83名の児童が調査対象者として本研究に参加した。その内訳は、表1に示すとおりである。

表1 調査対象者内訳(人)				
	1組	2組	3組	4組
男子	17	17	16	50
女子	11	11	11	33
合計	28	28	27	83

注：6年生のときの学級所属

要因計画

3（調査時期）×3（社会測定的地位水準）の2要因混合計画。

手続き

調査は集団場で実施された。各質問紙尺度からなる冊子が配布され、質問紙に回答することが求められた。

調査時期

平成21年3月中旬、4月下旬、5月下旬にそれぞれ同様の質問紙による調査が行われた。

質問紙

質問紙は、学級適応感尺度（渡邊,2006）、心理的距離地図（PDM; 古川他, 1983）、学級雰囲気尺度（根本, 1983）で構成した。

学級適応感尺度は、教師との関係「先生に話しかけられるとうれしい」など7項目、集団での規律・役割「クラスのルールやきまりを守って行動している」など6項目、級友との関係「いつも休み時間などに、クラスの友達といっしょに楽しく遊んでいる」など5項目、学習における積極性「授業中に質問ができる」など4項目の4つの下位尺度（合計22項目）で構成されていた。

PDMは、小泉（1991）に基づき、PMD用紙127mm×147mmの長方形の枠の中央に自己を表す顔を示したもので、調査協力者は、枠内に学級で親しい友人を8名までで表し、その氏名を記入することを求められた。

学級雰囲気尺度（根本, 1983）は、学級雰囲気を把握するのに適当と考えられる19の形容詞対からなり、安心（いごこちのよい いごこちの悪い、きゅうくつのびのびできる）、沈静（沈んだ うきうきした、つめたい あたたかい）、凝集（まじめな 不まじめな、まとまりのない まとまりのある）、切迫（せかせかした のんびりとした、ひまな いそがしい）の4因子で構成されていた。

結 果

学級適応感尺度について

学級適応感得点から新たな学級への適応過程を検討するために学級適応感尺度が使用された。この尺度は、渡邊（2006）によりその信頼性が満足できる水準であることが認められている。前学年末（3月）に調査した結果の各下位尺度の係数は、「教師との関係」.88,「集団での規律・役割」.72,「級友との関係」.77,「学習における積極性」.84であった。尺度全体（21項目）の α =.88であり、渡邊（2006）と類似の結果であった。

本尺度の分析にあたっては、前学年末（3月）調査時のIsss平均値+1SD.以上の得点を示したものをIsss高水準群（以下H群）、平均値-1SD.以下の得点を示したものをIsss低水準群（以下L群）とし、残りをIsss中水準（以下M群）とした。

Isss（田中, 1979）は、PDMに表された友人を選択・被選択関係として、学級集団内の個人の社会的地位を次の式で算出した。

$$\begin{aligned} \text{CRS} &= \text{C} \cdot \text{R} \quad \text{C} \dots \text{被選択} \quad \text{R} \dots \text{被排斥} \\ \text{mc} &\dots \text{相互選択} \quad \text{mr} \dots \text{相互排斥} \\ \text{N} &\dots \text{成員数} \quad \text{d} \dots \text{選択排斥制限数} \end{aligned}$$

ただし、本研究で採用したPDMの場合、排斥時の描出は求めているので、mrは0として上記の式によってIsssを算出した。（最大値+1 最小値-1）

本尺度の反応に基づき調査時期別・Isss水準別に平均得点とSDを整理したものが表2である。この表に示す結果に基づき3（3月中旬・4月下旬・5月下旬）×3（H群・M群・L群）の2要因分散分析を行ったところ、「級友との関係」に関して、Isss群の有意な主効果が認められた（ $F(2,72)=3.69, p<.05$ ）。Tuhkey法による下位分析を行ったところ、L群よりもH群の方が有意に高得点を示すことがわかった。その他には有意な主効果及び交互作用は見られなかった。

学級雰囲気尺度について

学級雰囲気の認知からみた新たな学級への適応過程を検討するために、学級雰囲気尺度が使われた。本尺度についても根本（1983）によりその信頼性が満足できる水準であったことが認められているものである。

本尺度への反応に基づき、調査時期別・Isss水準別に各因子の平均点及びSDを整理したものが表3である。この表に示す結果に基づき、全体得点と各下位尺度を従属変数とし、それぞれに3（3月中旬・4月下旬・5月下旬）×3（H群・M群・L群）の2要因分散分析を行った。その

表2 調査時期・社会測定的地位水準ごとの学級適応感尺度の平均値とS.D.値

		3月	4月	5月
		平均値 (S.D.値)	平均値 (S.D.値)	平均値 (S.D.値)
教師との関係	低群 (N=12)	17.33 (4.77)	17.33 (6.11)	18.00 (5.16)
	中群 (N=46)	18.52 (3.79)	19.17 (3.59)	19.04 (4.69)
	高群 (N=16)	16.12 (3.84)	17.31 (3.97)	17.18 (3.81)
集団での規律・役割	低群 (N=12)	19.33 (3.49)	21.00 (2.98)	20.25 (3.84)
	中群 (N=47)	20.25 (2.25)	20.40 (2.74)	20.14 (4.08)
	高群 (N=16)	20.87 (2.12)	21.12 (2.27)	21.12 (2.27)
級友との関係	低群 (N=11)	15.63 (4.41)	16.63 (3.77)	15.63 (4.63)
	中群 (N=48)	17.64 (2.47)	17.35 (2.58)	16.58 (4.30)
	高群 (N=16)	18.93 (1.06)	18.18 (1.47)	18.50 (1.63)
学習における積極性	低群 (N=12)	11.00 (3.21)	11.08 (3.08)	11.33 (3.47)
	中群 (N=48)	11.66 (2.90)	12.08 (2.84)	12.37 (3.32)
	高群 (N=16)	10.25 (3.49)	10.87 (3.36)	10.25 (3.33)
学級適応感全体	低群 (N=11)	63.36 (11.45)	65.54 (12.76)	65.90 (13.87)
	中群 (N=45)	68.46 (8.34)	69.51 (9.16)	68.46 (13.98)
	高群 (N=16)	66.18 (9.05)	67.50 (8.76)	67.06 (8.66)

結果,「切迫」に調査時期の主効果が見られ,5月より3月の得点が有意に高かった ($F(2,73)=3.26, p<.05$)。表3からも明らかであるが,「安心」に有意な傾向差がみ

られ,3月より4月の得点が高い傾向が示された ($F(2,73)=2.59, p<.1$)。

表3 調査時期・社会測定的地位水準ごとの学級雰囲気尺度の平均値とS.D.値

		3月	4月	5月
		平均値 (S.D.値)	平均値 (S.D.値)	平均値 (S.D.値)
安心	低群 (N=12)	6.41 (1.37)	7.16 (1.40)	6.83 (1.74)
	中群 (N=48)	6.33 (1.20)	6.72 (1.14)	6.58 (1.31)
	高群 (N=16)	6.75 (1.00)	6.81 (1.16)	6.93 (1.12)
凝集	低群 (N=12)	6.25 (1.28)	7.08 (1.31)	6.58 (1.88)
	中群 (N=48)	6.14 (1.09)	6.10 (1.13)	6.25 (1.32)
	高群 (N=16)	6.25 (1.18)	6.25 (1.18)	6.62 (1.14)
沈静	低群 (N=12)	6.75 (1.35)	6.75 (1.28)	6.83 (1.40)
	中群 (N=48)	6.60 (1.30)	6.52 (1.03)	6.45 (1.20)
	高群 (N=16)	7.06 (0.92)	6.62 (1.25)	6.31 (1.35)
切迫	低群 (N=12)	5.50 (1.08)	5.33 (1.37)	5.25 (1.05)
	中群 (N=48)	5.37 (0.98)	5.12 (0.98)	4.85 (1.09)
	高群 (N=16)	5.81 (0.75)	5.31 (0.79)	5.37 (0.80)
全体的雰囲気	低群 (N=12)	55.08 (9.80)	60.25 (8.93)	57.33 (11.90)
	中群 (N=47)	54.93 (7.82)	55.65 (8.11)	55.76 (9.32)
	高群 (N=16)	57.31 (6.82)	57.31 (6.82)	57.06 (7.68)

考 察

まず、児童の社会的地位が学級適応感に与える影響について考察する。学級適応感尺度の各因子を調査時期・Isssの水準ごとに分析した結果、「級友との関係」においてH群がL群よりも優位に得点が高かった。社会的地位について検討した先行研究は多く見られるが、対人関係のスキルとの関連について述べられているものが多い（小石・片山・八幡・長瀬, 1993; 小石・松田・上本・岩永, 1994; 小石・森・上島・山本, 1995; 嘉数・前原・金城, 1991）。それらの研究から、社会的地位の高い、いわゆる人気児童群は、社会的スキルの数が多くまた、レパトリーも多いと考えることが妥当であり、その低い児童群は、消極的であったり、不健全な攻撃性をもっていたりするとされている。このようなことから、社会測定的地位指数の高い児童が、良好な友人関係を築き、安定した友人感情を持つという結果は妥当と思われる。

その他の因子において、調査時期及び社会測定的地位水準において有意差が見られなかった。北田（1986）は「教師への態度」の因子において編成替えの有無、適応水準、調査時期の要因に主効果が見られたと報告している。適応水準については、同一の尺度を用いて独立変数及び従属変数としており、分析方法には疑問が生じた。しかし、学級編成替えと調査時期についての結果においては、本研究には同様の結果が見られなかった。これについては、前学年での担任と児童との関係、新たな担任について児童がどの程度情報をもっていたかなどの要因が影響を及ぼしていると考えられ、学級編成替えという要因のみでは説明しかねると考える。担任教師は、学級編成替えにより担任や学級構成員の変更を行う。担任教師は、児童が新たな環境へ移行することにより、児童の環境適応再構築をねらっている。言い換えれば、新しい学級にすることで仕切り直しをねらっていると言える。しかしながら、本調査の結果からは、児童の学級適応感において時期的変動が見られなかったことから、児童にとって学級編成替えは危機的な環境移行と認知されていないことになった。その原因として、調査対象小学校は、毎年学級編成替えを行っており、6年生に進級するまでの5年間に何度か同じ学級になった児童がいたと考えられること、5年から6年へ進級したとしても学習する教科及び学習方法が変わることがないことがあげられた。

学級雰囲気認知においては、「安心」及び「切迫」の因子で時期的変動が見られた。「安心」に関しては、3月と4月の間に有意傾向が認められた。しかし、3月と4月の間のみにしか有意傾向が見られなかったこと、そして学級適応感のどの因子にも時期的変動が見られなかったことから、一時的なものであると考えられる。期待について伊藤（2007）は、「これから起きると予測できる

出来事に先行して生じる観測可能な行動を指す。」としていた。今回の調査では、新たな環境に移行したばかりでどのような学級になるか不透明な時期にもかかわらず好意的な認知がされていたことより、児童が自らの所属する学級がそのようにあって欲しいという願いが表出した結果と考えることが妥当であろう。また、東（1981）は、どこに注意を向け、どのように情報を取捨するかを決める枠組みを知覚の図式とし、期待は知覚の図式の重要な構成要素としている。そして、知覚のみならずすべての行動は、その図式のもとに生ずるとし、思考や問題解決の難易に著しい影響を及ぼすとしている。したがって、児童は、新たな学級に移行したとき、その学級が自分にとって安心できる場所であるかどうかということに強い関心を持つと考えられる。個々の友人または担任教師に対するものよりその総体としての学級の雰囲気に児童の関心が向いているということは、興味深いことである。しかしながら、これは、先に述べたように学級を構成する級友についての情報がある程度持ち合わせていることと学習活動等に大きな変化がないことが影響していると考えられる。

「切迫」に関しては、3月よりも5月の得点有意に低かった。これは、5年生3月時点より6年生5月時点の方が明らかに「いそがしく」「せわしない」と認知していることを示している。調査対象小学校の6年生の5月は、委員会活動が開始される時期で、特に6年生はその運営や実行の中心的な立場となる。また、大きな学校行事を控え、その準備も始まっていたため、休憩時間など以前であれば自由な時間がそれらの時間に費やされるようになったことが、切迫感を高めた大きな要因と考えられる。したがって、「切迫」に関しては、学級編成替えというよりも進級による時期的なものと考えられる。

以上より、6年生においては、学級編成替えという環境移行が学級適応感に及ぼす影響はあまり見られなかった。しかし、調査対象小学校が、毎年全学年で学級編成替えを行っていることと学級数が3学級であることから、6年生までに同じ学級に属したことがある児童も多いと推測されること、学校内で行われる様々な活動で児童が少なからず既知の状態にあったことも変動の少ない理由と考えられる。学級編成替えが隔年で行われている場合や学校の規模によってどのような影響があるかは、今後の検討課題である。

引用文献

- 浅川潔司・夏野良司・古川雅文・和気清（1992）. 海外帰国子女の学校適応に関する発達・臨床心理学的研究 平成3・4年度科学研究費補助金研究成果報告書 東洋（1981）. 心理学事典 藤永保（編） 期待 平凡社

- pp. 142-143.
- 石隈利紀 (2006). 学校心理学 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 伊藤正人 (2007). 心理学事典 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 期待 有斐閣 p. 163.
- 嘉数朝子・前原武子・金城洋子 (1991). 児童の社会的問題解決能力 社会測定的地位や親和動機づけとの関係 琉球大学教育学部紀要, 38, 339-346.
- 小石寛文・片山絢子・八幡佳英・長瀬善雄 (1993). 小学校低学年児のソシオメトリック地位の安定性と仲間関係スキルとの関連 神戸大学発達科学部研究紀要, 1(1), 77-86.
- 小石寛文・松田敦美・上本准司・岩永恒和 (1994). 小学生のソシオメトリック地位と仲間関係スキルに関する縦断的研究(1) 小学校低学年時に仲間関係スキルに問題があると思われた子どもを中心に 神戸大学発達科学部研究紀要 2(1), 1-12.
- 小石寛文・森一弘・上島克己・山本智一 (1995). 小学生のソシオメトリック地位と仲間関係スキルに関する縦断的研究(2) 学級編成替え後の仲間関係の変動を中心に 神戸大学発達科学部研究紀要, 3(1), 1-10.
- 北田清隆 (1986). 児童の進級にともなう学級適応に関する研究 学級編成替えの有無を中心に 兵庫教育大学修士論文(未公刊)
- 小泉令三 (1986). 転校児童の新しい学校への適応過程 教育心理学研究, 34, 289-296.
- 小泉令三 (1987). 受け入れ学級のクラス替えが転校児童の交友関係に与える影響 教育心理学研究 35, 179-203.
- 小泉令三 1992 中学校進学時における生徒の適応過程 教育心理学研究, 40, 348-358.
- 古川雅文・藤原武弘・井上弥・石井眞治・福田廣 (1983). 環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達の研究 心理学研究, 53(6), 330-336.
- 田中熊次郎 (1979). ソシオメトリーの理論と方法 明治図書
- 内藤勇次・浅川潔司・小泉令三・米澤孝雄 (1985). 児童の新教育環境移行に関する研究 兵庫教育大学研究紀要, 5, 81-90.
- 根本橋夫 (1983). 学級集団の構造と学級雰囲気およびモラルとの関係 教育心理学研究, 31(3), 211-219.
- Wapner, S. (1981). Transaction of persons-in-environments: Some critical transitions. *Journal of Environmental Psychology*, 1, 223-239.
- Wapner, S. Cohen, B. & Kaplan, B. (1976). *Experiencing the environment*. New York: Plenum Press
- Wapner, S., & Demic, J. (1998). Developmental analysis: A holistic, developmental, systems-oriented perspective. In W. Damon & R. M. Lerner (Eds.), *Handbook of child psychology: Vol. 1, Theoretical models of human development* (5th ed.), New York: Wiley, pp. 761-805.
- 山本多喜司・S.ワップナー (1992). 人生移行の発達心理学 北大路書房
- 渡邊千絵 (2006) 担任教師により援助ニーズが大きいととらえられた児童の学級適応に関する研究 兵庫教育大学修士論文(未公刊)

謝 辞

本研究調査の実施にあたり、ご協力をいただいた鳥取市立J小学校の校長先生、担任の先生方及び児童のみなさんに厚く御礼を申し上げます。

(2009.9.1受稿, 2009.11.19受理)